

はばたきインクル支援だより



深谷はばたき特別支援学校 令和2年12月 1日 No.26



小学校に巡回支援に行くと、記憶の弱さから学習面や生活面での困難さを見せる子どもに気付くことがあります。先生方からは「何度言ってもなかなかわからない」「忘れ物が多い」「友だちと言った・言わないでケンカになることがある」などの相談があります。「記憶」というものについて一緒に学びましょう。今回は「記憶とはどういうものか」、次回は「記憶の弱い子どもへの支援」について扱います。参考として、『ワーキングメモリを生かす効果的な学習支援 学習困難な子どもの指導方法がわかる！』湯澤正通・湯澤美紀(学研のヒューマンケアブックス)を使っています。

特集 記憶とはどういうものか？

記憶には3つの過程があります。①覚えること(記銘)、②蓄えること(保持)、③思い出すこと(想起)です。

例えば「今日、宿題で漢字のプリントを配りました。家でやってきてください。明日、先生にプリントを出してください」と指示を出したとします。児童生徒は目で先生の提示したプリントを見たり、先生の声を聞いたり、手の動きなどを見て情報を得ます。この時に「短期記憶」として頭の中に保存します。

年齢	記憶の容量
3歳代	2
4歳代	3
5歳代	4

短期記憶は右のような目安があります(認知・言語促進プログラムより)。4歳代の「3」とは、数字を3つまで、例えば「5. 9. 2」を短期記憶で保持することができるということです。記憶容量が3ならば、「お母さんはコンビニへ行きます」という情報ならば覚えることができるということです。時間だと数秒です。この短期記憶を長期的なものとして覚えるために、私たちは、再度言葉にして音声化してみたり、コンビニでお母さんが買い物をしている姿を思い出してみたりして、イメージを明確化します。

「長期記憶」は、「エピソード記憶」「意味記憶」「手続き記憶」の3つがあります。

「エピソード記憶」は自分の体験を伴う記憶です。漢字のプリントをやっている姿や、プリントを提出している姿など、経験からの記憶です。エピソード記憶は、似たような経験が関連し結びついていると言われます。漢字のプリントを思い出す時に、算数のドリルを思い出したり、宿題を忘れて慌ててしまったりした事などを思い出します。

「意味記憶」は、「宿題は家でやるもの」「宿題は先生に出すもの」といった一般的な知識の記憶のことをいいます。

「手続き記憶」はこれらとは少し違ったものになります。よく「小さい頃に自転車に乗れると、何年か乗らなくても、乗り方は忘れない」「一度泳げるようになると、次の夏まで泳がなくても泳ぎ方は忘れない」と言いますが、そのことです。技術を学ぶ時の記憶で、一度身につくと、手続き記憶の働きは衰えないと言われています。

ワーキングメモリ (作業記憶, 作動記憶) とは…

短い時間に頭の中に情報を保持しつつ処理する能力のこと。会話・読み書き・計算など学習や生活の基礎となる能力。ワーキングメモリは、言語的短期記憶(数、単語、文章などの言語を司る部分)、視空間的短期記憶(イメージ、絵、位置情報などの視覚を司る部分)、中央実行系(イメージ、絵、位置情報などの視覚を司る部分)から構成される。

子どもの特質と記憶の関係

例 読んだり書いたりすることが難しい子

読むことが難しいと、先生が「漢字プリントを…」と板書しても、その情報を理解することに時間がかかってしまいます。聴覚情報は即時に消えてしまうので、文字など視覚情報として提示することは有効な支援方法ですが、子どもの特質によっては、書いたものを見るよりも、口で言ってもらった方がわかりやすいという子どももいます。

連絡帳に書くことや、書いたものを読むことが難しいと、家に帰ってから連絡帳を見ても、何をすればよいのかよくわからなくなってしまいます。プリントをやろうとしても、漢字を思い出すのに労力を要し、疲れてしまいます。

例 注意集中が難しい子

注意集中が難しいと、先生の話や提示している物への注意が逸れやすくなります。耳や目を向けていても、集中できる時間が短いことも考えられます。先生が宿題の説明をしている時に、近くの友だちが消しゴムを転がしてしまうと、それをじっと見ている、「漢字」しか頭に残らなくなってしまうこともあります。

一方、話を聞き取ることができても、思い出す時に、「前、宿題を忘れた時に〇〇さんが『また忘れた…』と言った」ということを思い出し、それで頭がいっぱいになってしまうこともあります。

例 感覚過敏・感覚鈍麻のある子

聴覚に過敏さがあると、先生が説明をしている時に、校舎の外を走る車の音が気になったり、エアコンの音が気になって、話を聞き取ることができなくなる子どもがいます。教室がザワザワしている時に説明をされても、聞き取れなくなってしまいます。

わかりやすいように、と大きな声で説明をしても、ただのノイズ(雑音)にしか感じない子どももいます。

例 エピソード記憶がうまく働かない子

前の項でエピソード記憶の説明をしました。子どもの中には、同じような経験が同じ仲間として結びつきづらいということがあります。連想ゲームなどをして、全く広がりが見られないことがあります。例えば「ケーキ」と言ったら、「クリスマス」「誕生日」「ろうそく」などと連想ができますが、「チーズケーキ」「チョコレートケーキ」とただ種類を上げてしまう子どもがいます。こういった特質を持つ子どもは、知識の関連性から思い出すことが難しくなってしまいます。

例 見通しの弱さのある子

帰宅し、おやつを食べている時に、家の人から連絡帳を確認しながら「漢字のプリントが宿題で出ているね。この後、何をしなくちゃいけないかな？」と聞かれると、「おやつを食べる」と答える子どもがいます。見通しが弱く、もう少し先の時間へ意識を持って行くことが弱いためです。こういう子どもは、過去・現在・未来に話に移ると、混乱することがあります。



支援している子どもの中に似たタイプの子どものいたでしょうか。「何度言ったらわかるの？」は、支援者が何度言ってもわかってもらえないような伝え方をしていることがあるかもしれません。また覚えさせることだけではなく、どうすれば思い出しやすくなるかも考える必要があります。次回は、支援方法について考えていきます。